



## カンタベリー補習校長の思い！



1ヶ月前に本校理事会からの要請を受けて、保護者の皆様に向けて、私の40年間の教職人生から学んだ色々な思いを話させて頂きました。皆様、どのようにお感じになられたでしょうか？「子育て」や「学校教育」というものの理解に少しは役立って頂けましたでしょうか？

改めて言うまでもなく、学校は「学びの舎」です。子どもが将来大人になるに際して必要になるであろう社会的知識や集団生活の基礎となる人間関係を学ぶ場です。

「集団で学習する場所、それが学校です。」集団で学習

することがなくしては学校ではありません。学校は個人塾ではありません。

私は3年前、カンタベリー補習校に赴任して子ども達の様子を見た時に、日本に帰国を前提とした児童生徒を対象とする文部科学省が掲げる補習校の定義とは、かけ離れている実態を感じました。実際に、本校で日本の中学校・高校に進学する割合はかなり小さいです。とするならば、大多数の子どもたちの実態に即した授業にすべきだと判断して、その方向に舵を切りました。学校長の学校運営とは、そこに通う子ども達の実態に即したものでなければならないと思っています。そのため、ひょっとしたら、文部科学省が掲げる本来の補習校として通ってきた子どもたちに対しては、期待を裏切る形になったかもしれません。しかし講演会でも話しましたが、日本の学校においても、それぞれの地域の学校により、学力の違いもあれば、部活動の強さの違いもあります。学校長はその学校の実態を把握し、現在その学校に求められていることに即した学校運営が必要になります。それは学校長に課せられた重要な責務であり、学校長にしか出来ないことなのです。

親御さんにとっては、自分の子どもが一番可愛いに違いありません。当然のことです。ですから、学校に自分の子どもの特長にあわせた教育を望まれるのは極めて自然の流れです。しかし10人の子どもがいれば、10通りの保護者の教育的な要望があります。100人いれば100通りあります。現在本校は200名の児童生徒を抱える補習校です。大変申し訳ないですが、個々人の要望に沿って、学校がそれに対して一つ一つ応えていくということは、大変難しい相談であり不可能な問題です。集団で学習するというのはそういう事なのです。

### 友達から学ぶ

- ・背の高い子、小さい子
- ・足の速い子、あまり速くない子
- ・話すことが好きな子、無口な子
- ・本を読むのが好きな子、嫌いな子
- ・几帳面な子、大雑把な子
- ・みんなといるのが楽しい子

一人でいるのが楽しい子

**いろいろな個性の子どもと交わる！**

## どんな子になってほしい？

- ・ 明るく 健やかに 仲良く
- ・ 日本語力向上 成績優秀

**明るく 健やかに 仲良く**

本校には「日本の教科書を使って国語・算数・社会を日本語で学習する」という基本的な原則があります。ですから児童生徒には、補習校に来たら「英語ではなく日本語で話をしましょう！」と常に訴えています。先生方もそのように指導しています。しかし、実際には本校に通う子ども達の日本語力に大きな差があるのは事実です。それは家庭での日本語会話環境の違いもあれば、保護者の

支援の度合い、本人の努力等、色々な要素が混ざりあった結果の現象であると言えます。子ども達が育っている環境は千差万別です。

学校とは「知らない事やわからない事があるから、それを学びに通うところ」です。ですから、何も知らない子ども達や、わからない子ども達、理解の遅い子ども達がいることは、言わば当たり前の事です。そんな子ども達に教育の場を提供して、一緒に学習しながら、みんなで理解し合うというのが学校です。

講演会でも申し上げましたが、保護者の皆様が子どもを補習校に通わせる目的として「日本語力向上」と「明るく健やかに仲良く」とどちらの優先度が高いでしょうか？実際に日本語能力が劣るためにクラス内での先生や友達とのコミュニケーションが取れず、苦しんでいる子どもに対して「英語を話すな！」という指導をすることはできません。それは、学校教育とは言えません。日本語力を高めるといふ目的以前に、「集団で子どもを育てる」という教育の大前提があります。もちろん補習校では、日本語で話すことが原則ですから、子ども達に努力をさせていますし、決して英語を話すことを認めているわけではありません。学校には様々な子どもがいます。足の速い子、読書の好きな子、几帳面な子、日本語の上手な子がいます。でも、そんな子ども達も、足の遅い子や読書の嫌いな子、几帳面でない子、日本語の下手な子ども達から、必ず何かを学んでいるのです。子どもたちは、これから中学校、高校、大学と進学し、社会人として新しい会社や企業の枠組みに入り活躍していく人生を歩むものと思います。そんな新たな学校や会社に入り、いろいろな人と出会い、経験豊かな上級生や上司から指導助言を受けて成長していくのだらうと思います。正しく

「教え・教えられ」の人間社会のはずです。それを学ぶことができるのが集団教育である学校の良さだと思います。もし、保護者が、自分の子どもの日本語能力向上のみを考えておられるなら、大変残念な言い方ですが、本補習校以外の選択を考えたほうが良いのかもしれない。

子どもは成長していきます。小さいうちは、お父さん、お母さんが喜んでくれることが嬉しくて、それに応えようと努力します。しかし、ある年齢になれば、保護者が赤い絨毯を用意し、その上を歩かせようとしても、「僕は、青い絨毯の上を歩きたい」という時期は必ず来ます。親離れの時期は、意外と早いのもかもしれません。いつまで、保護者が絨毯を用意しますか？絨毯を自分で準備させるように考えませんか？！

## 子どもの成長

- ・ 小学校低学年 親は神様
  - ・ 小学校高学年 自我の確立
  - ・ 中学校 親を外から見る
- 父親・母親と距離感**  
**過保護？ 放任？**  
**子どもは自立！**